蝦夷志料

十

冊 二二 架 三三 函 三〇三 號 三九四八 類 和書

内閣文庫

番號 和 29408
冊數 210 (11)
函號 178 119

内閣文庫 三〇三函 三九八架

103

国立公文書館
National Archives of Japan

閣
109

内一二〇七一號

蝦夷志料卷第十

松前部

山海第四 附海路巖石

山

蝦夷地風俗言上書

松前城下より東丑寅ふ當り歳間と中大山あり

近邊ふ其ゝ此多る大山ふゝ古來より金銀多く

出ひよゝ

松前城下より三里程有ゝ赤神と中所鉛山あり

松前蝦夷記

金山場所云〻東在郷知内村迄十所曾祖父志摩守代能き金山内産ハ右之金山元和年中不残拝領仕ハ其以前右金山より出ハ砂金百枚獻上仕ハ處則右砂金を拝領仕ハ

津軽一統志巻十中

ヲリアンナイ村より シリウチ村へ七里 此間山坂難所

家數 三十計

蝦夷紀事

國中東南の方は山多く西北の方ハ平地有山は岩多く〻〻岑嶺さるとくきり立多るこの如し高山の絶頂を多くは金銀の氣或を硫黄の氣ふくもけ爾さ〻る土地ふく金氣多きこと餘國ふ比類なく〻いるり七十年以前ハ年〻砂金を取内領主へ毛をきめ京大坂へも夥しく出しなる其砂金場を松前領内ふくハ仙見(セムケン)の嶽シリウチ云〻すへく餘國より出る砂金ハ金山より流き出る砂金ふて依那ふくをわけの計り事なり松前蝦夷地の事ハ

山川をいふ及それ原野とそを砂金あり あへて金
山より流れ出るふあるに云へ志すれとも土地一様ふ
生する其根源の金氣ある處あるへ来ふ此を是を
尋ねるふ砂金の金氣場處の根源ふ金山ありとも
澄撓相乱し現ふ見極め多りと以為り
石山ふそあるさ法山ふは枝あり上の國山とそ十
里ふ及ふ大山檜山なり廿年以前今按るふ元文二年丁巳云へとふこを
三百年八享保二三年の頃を云へるふを とも其此ふそ火を出し七日七夜焚
計る故山中分去焚尽しそ多り其後八留山ふなり

今ふ伐出さるる云へ
松前領分中央の大山八仙見(セムゲン)の嶽といふ松前より
八里あり山への峠を越る事十一ふしそ仙見の
嶽社半腹ふ到る此絶頂へのぼりて見る時を目
力の及ふ處八遮るもの なし南部焼山より津軽の
岩塚山西八ケニ千の嶽ヲコシリ海中ふ見え
東八箱館より北へ續く群嶺つ なり隔日山ユウ
フツ遠く見ゆ松前を真下ふしそ船の寄るまて
見ゆるなり是松前中金銀山の根ふといふ

蝦夷松前烏雌卷

松前領分中央ノ大山ハ仙見ノ嶽トいふ松前より北八里あり山くノ峠を越ること十一峠ふして仙見ノ嶽へ至る此絶頂へ登り見る時ハ目力ノ及ふ所ハ遮るものなし松前中ノ金銀山ノ根本なり金銀山ノ事ハ本業なれ共深山幽谷へとけ入る人力ノ及ふ處ハ吟味もいたしたれども土地廣く金銀山數多ノこと故ふく中く十分一も見極難し

松前志卷三

福山近邊ニテハ鬱金嶽ヲ大嶽トス東部支利宇知河ノ源ナリ福山ヨリ東北ニアタレリ其里程從城下（忍ラクハ九ヶ坂）九里二十町餘アリ嶽ノ麓ヲ離レテ風段ノ平地アリ昔時金鑿ノ徒多ク屋舍ヲ建連子一大郷ノ如クナリケルヨリシテ千軒トハ名ツケタリ然レトモ嶽ノ本名ニ非ス鬱金ノ名ハ此山金氣サカンナルカ故ニ右ヨリ名ツケ呼ルヨシ古老ノ説也此嶽夏月モ又猶雪アリト云ヘリ

三國通覽補遺上巻

東蝦夷地ニ松前城下ヨリ丑寅ニ當リ淺間ト云大山アリ近邊ニ勝レタル大山ナリ古來ヨリ金銀多ク出ツ松前家ノ先祖此地ヘ移封ノ節諸國ヨリ入込居ル金堀共ノコラス追拂ヒシトソ右ノ堀取タル跡高サ數十丈屏風ノ如ク切立タル所アリ今其所ヲ切通シト云此山ツヽキ東面ノ山々ノコラスミヨシ堀ノ跡所々是アリ

蝦夷秘鑑中巻

セヒケシ卫サシ大田山等の高山其外數多

蝦夷巡覽筆記巻一

赤神村

村端ニ川アリ幅二三間當所澤ヲ行コト一里位両方切立木立原ユキ鉛山アリ略下

ジヤバミ

此邊山近ク木ナシ略下

ソマルヘ
此處小坂上リ野道行ク野幅セハク山近
ク木ナシ
原口村
此所ノ沖ニ大島アリ焼山ナリ舟路七里
當所山近ク略中小坂上リ山ノ腰ヲ通ル略下
堂ノ澤
此處略中是ヨリ山ノ腰ヲ通リ夫ヨリ小坂
下リ小砂子村ヘ出ル

小砂子村
當所略中此處山切立砂濵小川アリ幅一二
間略中夫ヨリ大岩山切立險ニモワタテ石
ト云大立岩アリ
大アンサイ
此處略中上ノ國村ヘ越行山道アリ夫ヨリ
シ子コ濵砂道ユキ小坂上リ平山道行急
小坂下リ略下
上ノ國村

當處（中略）小村トカフヨリ木子内村ヘ山越
道アリ
トカフ
上ノ國村ヨリ（中略）此處ノ山厚澤邊奥ヌカ
ノ山ナト、ツ、キ山也云云夫ヨリイナヲ
坂地藏山位ノ山越アリ
乙部村
此處澤アリ（中略）夫ヨリ坂上リ山奥ヘ半里
程ユキ此邊高山近ク木アリ

小マタ澤ヨリ澤マヽ、川原通
一里餘行夫ヨリ小石坂地藏山一里半位
上リ切此所ヨリ向ノ方亀田箱館入江見
ユ（下略）
トウケ澤
當處ヨリ長根ツタヒ（中略）澤川ツタヒ一里
半位登リ夫ヨリ半里位山ヘ登ル道筋大
笹原至テ難所ナリ（下略）

福島村

此邊両方山木立夫ヨリ尤手ノ澤へ入リ
夫ヨリ両方山切立（中略）四方高山大木立（下略）
福島村ヨリ知リ内村マテ海岸月ノ崎山切
立（下略）

蝦夷地見聞録

鉛山ノ様ニ所〻ニ見當リ有ハ山稼あるハ出
銀ニ有ル歟也出ル所〻ニ見とるも嶮岨の澤〻
ノ事ニて稼場いと難所ニて容易ニハ
成難〻さて此ニ其筋の者ハ何も嶮岨ニ稼ぶれ
たるハ山〻ヲ吟味〻出鉛有ル極たらぬ山稼の
者ハ幾等もあるへし

西蝦夷地之内鉛石見當ル場所

松前在
赤神村　豊部内　ユウラツフ　サカツキ
日見市村之奥
ヲボユ

東海奇譚

吉岡浦ふ着船す松前へ三里の行程なりと云へ同
所ふ一泊す吉岡嶺ふ上る事三十餘町北大洋ふ
向ひ西方高山ふ拱す寒風殊ニさゝ浦〳〵截海の
うちハ碧ふして猶瑠璃を延ばるゝ如く後山ハ百
千尋ふして毋の〳〵雪ふゝ勢ハ大〳〵洋中ふう
の如帆影ハ胡燕の津さゝより少く三厩ハ花手
と〳〵見るこゝふくゝ先て　本邦の境界
を離れ此地方の山嶺ふある減ふ潮州の水土を
恐れる人の心をも今爰ふ思ひやる就飛の

さゝ津輕ふ泊權現の崎海中ふさ〳〵出る津輕
富士瓦然と見ゆ駿の芙蓉を伯仲の形あり是
則巖城山也
大松前の洞唐津内の洞二ヶ所云〳〵松倉山炭薪
を出ス支より東北を千山萬岳重〳〵と〳〵
蝦夷地方ふつゞく
辨天島大松前より乾ふあるゝ十餘町岩上簇〳〵
と〳〵洋中ふ出る事凡弐百餘間云〳〵磐上數千
尋をも數へ〳〵花表あり島中ふ山あり海中ふ

勃立〳〵其形椀を覆ふが如く盤姍して登る
こと百餘歩上に一宇あり東方に向ふ宮乃森
たる石を以て屋をふけり云〻
松前勇馬乃邸に〳〵西館と称せ頗る高く其上
観臺を構へり云〻芳岡嶺を見下し龍井の山より
指視〳〵之厩龍飛津軽冨士を海水を隔てゝ
遥望さて此地の山形水色上國の様と変し山を
峨〻と〳〵温雲をこゑ海を花〻として霜謂氣
深し

上乃國此邊山木立茂り殊に人家多く川に沿屬し
て水利宜處なり云〻此川岸にて右手拝を
山谿十餘里に〳〵東地木戸内（キコナイ）へ出る
未曾有記巻二
此山道を吉岡峠と云家高峯を地ゑい峠といふ
より〳〵恩愛峠松前第一の峠上り二里餘と云高きより
見渡せハ西北より東北まゝは皆同じさはる山乃
限りを知〻重りて目の及ぶ處山なり勢ハ女し
連山如波濤とハのゝる處をやりふちゑん云〻松前より

福島吉岡藪の外ハ海ふてうて来る轉折一なら
さ拙とを屋て左西北山邊右東南海なり中略今日を
海をを拙て山ふ入山崎村家居見えて云く茂樹
悪木ノ深山なり吉岡より上下ノ道程ハ近々れと
峠峨ハ一倍を知り内峠と云盤曲廿一折して嶺ふい
ゆるまて下ル顧ミハ山く眼下ふ重疊して登る
道を見を須百丈ノ梢足下ふ遥なり云く岩石ふ
多をうあて蹶る又坂ふ成是をを又初り内峠と
いふ十二三折ふて山間の野路也左ふ仙見岳

見仲雲有り北海隨筆ふ松前領分中央の大山ハ
仙見岳松前より八里有て山くノ峠を越る事
十一ふて仙見山の半腹ふ至る此絶頂ふ登りて
見る時を目力の及處ハさへきるをのふし云く東ハ
箱館より北へつ来て群嶺ふなりつ松前ハ直下ふ
て舟ノ泊を見ゆる也是松前の金銀山
ノ根本也をいふ

北征日記

十四日發松前中略十餘里得白神嶺隆起

連纍蟠窟巍峨而半腹稍見有村居者二三皆倚岨為樸其巔置烽墩以對龍飛峯

曰吉岡村中畧又得嶺亦曰吉岡

山曰知内嶺水曰四十八瀬而是其大數若水潦游至凌雪澌釋集潾暴漲溪流變遷故無有定形已橋梁三矼二餘皆厲揭濟之襟裾袖袂沾濡無餘嶺盡而下如入陷阱此北海隨筆所欲置塞以備蝦夷之處殊見其人乏恢拓撫納之略而當時彼猖獗亦可思量耳曰一渡河小舟濟東得山亦曰一渡嶺上十餘里涉水五六險奇類知内而視之知内多皆莫足道其上夷坦土色甚黑涅此元和中出金處所謂知内金云者取太頻不復産云迹今猶可見如不必深求地極高爽無水不知何以淘洗之數里曰湯臺尤轉五六里有湯泉故得名又望一峯葱翠森欝曰淺間嶽峻擬淺間故名之一作千軒其說言知内出金也嶽麓聚居者有千軒其名起云於此

蝦夷東西海岸里數帳

城下沖の口下濱より東の方

屏風岩

此邊より岩ろ小山とゝなる

赤崩

此處崩き山あり

小松前沖の口下濱より西へ

アカヒラ

此邊赤崩岩山あり

彦四郎澤

此處山高し

トウア澤

大岩山あり

海

蝦夷松前烏雌卷

津軽領外ゝ濱の内三馬屋云ゝ此渡より松前迄九

十二三里ばかりも難儀の渡りふてタツヒ中の潮
シラカミとて三流の潮筋あり法水の激流なる
如くふく風ゆる来時を乗切るゝ云て夏の間ハ
潮ばかりといふこゝをあり已の剌より未剌をのりに
止共ばかりせゝハ海底より潮湧出て四方より
大浪をゝ合せる故遠く見るのためハ絮のごとく
水面二段も高く見ゆるなり此時ハ宗こゝ多
舟ハ顛覆といへとも動くこゝをあゝ甚ハ難儀了
ばかりふきれとも潮ばかりふく破舟せることなし

此渡を過て舟着の處ハ則松前なり

赤蝦夷考

朝鮮の東海　日本の西海の潮水皆唐土嶋と
奥蝦夷の間拾餘里の所小海へ流ぎゝ事
前章に通　日本西海の潮汐ハ往古より今ふ
至て北へ流ぎゝ處奥蝦夷ハ拾餘里の吐口蝦夷
松前と南部の間拾餘里の吐口都合弐拾里ふて
朝鮮也　日本の懐水に潮汐を噴吐するゆゑ
甚以急流道理なり

東海奏譚

文化二乙丑年十月三日奥乃三厩ふ纜を解き既ふ龍飛を離れて龍飛の潮瀬ふうる共幅二十町そうり北海より東海へ達する潮勢なり水主等のいふ今日乃潮勢甚平なりと志るきとも船底ふ觸るく潮ハ鼓ことく胸ふ徹し雷鳴のことく船全く震動ス船中ふあるを乃ハ腰下重く足を轉ずる事かく頭痛強く眩暈ス乃ゆ名人端座ス乃なり平静といふ日を猶如此脳めり扶桑第一の難海たる事爰ふ至て思ふ志るる乃し船ふよハさる訓茨苓半夏陳皮三味煎服ス乃し あうり免是を防く又吐ス乃事なり中の潮龍飛より八静なり白神乃潮八東海より北海へ達する汐勢なり是を第三の汐と云ふ松前辯天嵩より未申ふ達する潮あり是と松前乃沖ふ合して宛轉周旋し激勢十倍ス扨ハ共幅僅ふ五六町そうなり尤井乃沖ふ至ても甚志川の也云く截海乃うちハ

碧ふ〳〵猫嬉を延るう如く後山を百千重ふ〳〵雪ふるぬハ先〳〵洋中ふうう如帆影を胡燕のつばさよりふく三厩ハ荒乎と〳〵英国こゝをふ〳〵云く龍飛の先津軽小泊權現の嵩海中ふさ〳〵出る事 下畧

沿海異聞 赤蝦夷風説考

日本國乃海水南海ハ西流西海ハ北流北海ハ東流東海ハ南流永久〳〵異なる事なり此理を詳ふせんと欲するの余り著す所乃造物起源を尋ね曉る為〳〵此條ハ利明副意也

終北録

松前洋中ニ有リ三険曰ハク龍飛曰ハク中潮曰ハク白神潮水皆自西北ニ來リテ横ハル於洋中ニ數千里ト人云フ此三潮之険甚シキニ於阿波之鳴門ヨリモ容舟至リテ此ニ遭フ害ニ者前後不少カラ蓋シ天之所ニ以ノ域ニ華夷ヲ者也是日ハ適風徐カニ潮恬不ト似レ平日ニ険艱シ然ル舟経ル三険ヲ之時ハ尚振ル撼揺蕩為ニ之カ吐眩顛仆ノ不能ニ自持スル者十ニ八九ナリ矣

海路

松前蝦夷記

塩首嵜より黒岩村より見ゆ陸路弐百
弐拾町きこり有て南部乃尻屋嵜より向
合ふて此間海上幾ふ五里きこり有て汐路至極
大難處横渡り渡海一条不叶より
松前町より諸方へ渡海の順風并逆風て次第
奥州津軽領青森へ道規海上弐拾八里

従松前津軽領今別高野嵜と申處まて西
風を請渡り高野嵜より青森まて西風を
掛ふ請渡申ふ由申酉風悪ゝ其外ゝ逆風也

同領三馬屋村へ海上拾弐里

西風ふて渡海　其外悪し

同國南部地つゝ

申酉風吉　山瀬風悪し

同所て内ゝり屋嵜并大畑へ

午未風吉　山瀬風悪し

同國津輕領小泊湊へ

北風吉

同領鰺ヶ澤へ海上九里

同領深浦へ海上三拾五里

同領十三へ

右北風吉

羽州秋田領能代へ海上四拾里餘

北風吉

松前地そとの内東郷亀田箱館そとの間へ

下り風

但從是未蝦夷地つゝ陸そ風を待合を渡りやすし

同地西郷江指へ

同地江良町迄ゝ山瀬風江良町より未下り

風ふゝ渡ヶ由

蝦夷地そうやへ

從松前西郷江良町迄ゝ山瀬風從江良町未

下り風ふゝ渡ヶ由

江戸方へ

南部大泊迄下り風從夫未北風を請陸ゝ風請
送り中より
北國西國へ
秋田領能代迄北風を請從夫未陸ゝ風請
送り中由
松前町へ從諸方渡海ゝ順風
奥州津輕領三馬屋より
山瀬風汁
同領青森より
同領平館迄下り風ふゝ渡り從夫松前へ山
瀬風汁
南部地より
山瀬風汁
津輕領小泊并鰺ヶ澤より
南風汁
同領十三并深浦へ
午未風きこり
羽州秋田領能代より

津輕領深浦迄山瀬風ふき渡り深浦より
松前へ午未風ふき渡る
右之通之外何風ふきても悪敷き東風ハ吹出しふ
出船いたし能ハ由必東風乃後ハ西降海上荒く
有之故とく出風を見合吹出しより渡る且又何
風ふきても或ハ東より南へ廻り南より西へ廻り
西より北へ出ケ様ふ順能風廻り吹ハ出ス除り急
ふ風替り不申俄ふ西風乃東ふなり北乃南ふ
なりふといたし たる風ふき替り安くハ故其
方と合を大切ふ見合申より殊ふ風きつり乃
勢ふて帆を持渡る故風世ふて時ふ程く渡海
不叶汐路強くハへハ中く艫櫂乃ちからハ吾ふ風ふ
て節艫櫂決してきく不申より
松前へ從江戸飛脚往来ふ時津輕領青森或ハ三
馬屋村迄急ハ節九日振常ハ十二十三日振ふ着順風
次第松前へ渡海取分冬向別乃山瀬風吹強申ハ
故時ふより風待三十日又ハ四五十日も滞留仕ハ事
也此度ハ由先去三月末より六月末まて折節山瀬

風吹申し故餘り風待滞留致候時節ふより
早速風能出船仕事度候へ共然西降り出し
風替り安く申し故是又悪く又月吹申し山瀬風を
恐れ吹申し故悪敷候へ
江戸へ松前飛脚急申し節も除り風待無之況
松前西風を請出船仕し故常ふ西風を度々吹取分
各向別る西風立申し二付早速出船仕事時々
有之則津軽領三馬屋村或同領青森へ其時分
之風向ふ悪く系付南部通り罷越し
志摩守先年南部領野邊地と申處より松前へ
渡海仕し野邊地より風並能渡海申し出陸路多
く桜けヶ申ゆ為勝を向能し共海上遠き程風見
合を間取り殊ふ津軽領平館迄南西の風をうけ
出し又山瀬風請申ゆ為ふ殊の外野邊地ふて
滞留五六十日も滞留仕し事有之難儀仕し二付近年
三馬屋より海海仕し出し夫とも風待餘程有之二十日
餘も逗留仕し事有之申し
松前ふて年中立安き風の時節

春二三月　北風
夏四五月　山瀬風
秋七八月　西干潟風
冬九十月　西風

風々名々事

東卯山瀬風嵐とも
辰出し風
巳下り風
南午下り風
若狭風
未干潟風　三馬屋村
申西干潟風
西酉西風小泊
戌たゞ風　松前船着
亥間風
北子間風北風とも
丑寅間下風下嵐とも
此間の風ふゝ三馬屋より出船

蝦夷志

我東北海岸距蝦夷南畏不甚相遠而其間海潮駛急蝦夷東南地角突然而出者名曰シラカミ崎ト相距南部地方只隔一衣帶水而已自津輕之地小泊發舟北行八里而到松前亦曰御厩津西北行十四里而到松前四時此路常通ス

津輕一統志卷十中

松前より下白神の崎まで午の方の風ふて渡海より登ふいあむの風山瀬風ふく

松前より下白神の崎まで午の方の風ふて渡海より登ふいあむの風山瀬風ふく然ハ此ハ事

松前より乙部あまで近岸下りふて渡海より登ふいあむの風山瀬風ふく

松前より あつけまで海上順風ふ晝夜四日ゐと海路弐百里ゐ空あつけより白神まで海路五六十里ゐ陸ハ

松前より せつやま迄海上午の方北風ふく渡海より下ふを ゐむの風能ゐ陸ハ

松前より せつやまで順風ふ晝夜五日ゐ空海上弐百五拾里ゐ空せつやより同所迄海上弐百五拾里ゐ空

蝦夷志拾遺序

陸奥國津輕郡自外濵海行七八里北有島又謂因屬之嶋嶼多世俗諸蝦夷千島上

北征日記

十四日發松前中略十餘里得曰白神嶺隆起連纍蟠窟巍峨而半腹稍見有村居者二三皆倚岨爲樔其巔置烽墩以對龍飛峯中間一海舩程六十里嶋隷陸奥國故道程用坂東ノ法蓋準令制下倣之而遥直徑蓋半之云云

松蝦地名通解

福島

小田西村迄海路二里餘

小田西

知内川尻迄海路二里餘

終北録

二月六日文化五戊辰年中畧午次野邊地由是東北太佐井西北太津輕驛正直其衝北則大海浸天遠通松前箱館

三月二十九日同年至三厩中略自此至松前洋
中有三險曰龍飛曰中潮曰白神潮水皆自西
北來横於洋中數千里人云此三潮之險甚於
阿波之鳴門客舟至此遭害者前後不少蓋天
之所域華夷者也是日適風徐潮恬不似平日
險艱然舟経三險之時尚振撼揺蕩為之吐眩
顛仆不能自持者十八九矣晩達松前館中略
四月初一日丁卯中略俗占立春後八十八日
必有暴風是日以當期舟人皆登陸避厄然天
氣晴快略無風濤是以下軍航海家兄來見十
三日登舟令師曰海氷已解賊船出没不測宜
各備弓箭銃砲矛槍以戒之松前人甲崎冨藏
數渉曾宇耶加良布刀善知地理通夷語因取
為嚮道已刺乘東南風放洋過小島無居民中略
日暮抵大島北望江差山自是舟行不舍晝夜
入夜金波滉瀁月色可観十四日早至江差洋
経熊石東北風作午田東南過於古志利
自松前至曾宇耶海道二百里此適當其半道

故舟人撤師例以過此為出関酌酒相慶
自三厩北至松前一十有三里海道自松前東
北至北蝦二百有五十里海道

巖

蝦夷巡覽筆記巻一

小砂子村

夫ヨリ大岩濵山切立際ニモツタテ石
ト云大立岩アリ

石崎村

當處中略此所濵少シセバシ夫ヨリ馬
トリワシリトイフ岩アリ砂道行

塩吹村

當處中略村中川アリ幅一間餘橋アリ
砂濵行海所々高岩アリ

松蝦地名通解

塩吹

此所沖ふ岩あり波歩つゝ拱を鯨ろ志田を
吹来たるゆゝふ見るる故和人驚け多るこの
立石野
此所野合ふ岩のある故ふ和人地名とおぼこの
松前蝦夷一圓行程記
塩吹村
此處沖の岩ふ塩吹穴あり

石

松前志巻十

ハラウタ石

自然生ノ石垣石ナリ其色鷹背色ニシテ奇
云ヘカラス西部上ノ國ヨリ東方原歌ノ名
産ナリ又西部クマイシノ邊ニ硯石アリト
云

東遊記

熊石といふ處ふゝ先年髑髏を掘出し多り

大さ醤油樽位を有とふ其棺の例より書石の
斧乃かゝちふ樽うたるもの多く出こう柄ふ空
通ひつゝ所〻穴乃形あり又砥石あり此物を磨
きたるも此を見えこう此砥石又物を研ふ至て妙
也と以為り惜むらくハ砥石ハ歩割〻方〻分けこう
予も其青石を見てるふ密緻甚〻堅き石なりいか
さ陸鉄ふ空なき世ふ此物ふてものを割こう事と
思ふる又先を指ふて引て見るふ其の尖こうちふと
如〻世ふ雷斧とて天こう妙うたるものとん得
多る者ありこれを見れハ人他ふ〻疑ふ事ふし
其傍ふマガタマと云ものも出こうといふ髑髏ハふく
義〻て埋多る處をいとゝ法故如也
蝦夷巡覽筆記巻一
ケハイ坂
坂上ル車一町位中略又野道行小流ア
リ小橋アリ左ノ方道ノ下タニ立石ア
リ山ノ方ニ藤巻石アリ

蝦夷志料卷第十終

内閣文庫
圖書寮文庫
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan